

八戸市美術館ボランティアだより

ハビボ通信

八戸市美術館
〒031-0031
青森県八戸市番町 10-4
TEL0178-45-8338
<http://www.hachinohe.ed.jp/artmuseum/>

「ボランティア」

八戸市美術館 「ハビボ会」会長 安藤清一

八戸市民一般対象の公開講座、八戸大学主催「そうけん土曜講座」が八戸商工会館で開催された。私は講師の一人として、ボランティア活動の講座を担当させていただいた。ボランティアについて下記のように述べた。

ボランティアに関心があるが、何をすればよいか分からない。ボランティアとはそもそもどんな意味なのか。

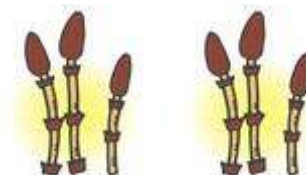
この言葉は 17 世紀にイギリスで「自分の意志で、軍隊で仕事をする人」という意味で使われたのが始まりである。日本では、①自分の興味や関心のあることから始める「自発性」②モノやお金のためでなく、社会について勉強したり、信頼できる人間関係を学ぶことで心の充実を図る「非営利性」③人や自然を守るという「社会性」④社会が変わるきっかけになる「先駆性」の 4 つの意味があるという。

これまではボランティアというと、どうしても奉仕や慈善事業といったイメージが強く、内容も障害者や高齢者の介護、災害や公害、環境や人権問題への対応といった、ちょっと構えたものが中心であった。ところが高度経済成長期を経て暮らしが豊かになったり、バブルの好景気がはじけてきたりすると、精神的な充実感を求める人々が増え、さらに、少子化や高齢化社会で余暇時間が増えてきたことなどで、ボランティアと活動への関心や意識、活動の様子・内容などが変わってきた。

また、1990 年代以降、国の施策としても、生涯にわたって自ら学ぶことをすすめる生涯学習の考え方が打ち出された。そのような流れの中から、自らの学びや趣味を深め、充実させる生涯学習という考え方とボランティア活動がドッキングし、楽しみながら社会貢献する「文化ボランティア活動」がクローズアップされてきた。

本来、ボランティアとは、人から指示されてやるのではなく、やりたいこと・できることを自ら進んで行い(自発性)、それがなんらかの社会の役に立つ行為(公共性)をさす。無報酬を基本にすることはいうまでもありません。ただ、理念や結果は同じでも、そのきっかけや入り口が「社会のため」か「自分のため」かの違いによって活動内容や状況が少し違ってくる。

ボランティアとは、「自由意志」を意味するラテン語に由来する言葉である。日本では 1995 年の阪神淡路大震災をきっかけとして、人々のボランティアへの関心が大きく広がりを見せるようになった。



生誕 100 年記念展

「佐々木泰南～書の魅力～」

八戸市美術館学芸員 山田泰子

明治四十二(一九〇九)年、八戸市に生まれた佐々木泰南。本年はちょうど生誕百年に当たります。そこで、八戸美術館では所蔵作品により記念展「佐々木泰南～書の魅力～」を開催します。

十三歳のころからすでに書を始めていた泰南は、書家を志し親の反対を押し切り十八歳で上京。篆刻(てんこく)の蘆野楠山の勧めで、時の大家柳田泰麓に書を学びます。入門して間もなくの昭和二(一九二七)年、第三回日本書道作振会全国展に出品した「李白詩 夜泊牛渚懷古」で褒賞を受賞し書道界にデビューを果たすと、二十三歳の同七(一九三二)年、第二回東方書道会全国展にて「謝玄暉詩 鼓吹曲」が最高賞を受賞して話題となりました。その後、二十九歳で東方書道会の理事審査委員という重職に就き、書家として確固たる地位を築きあげました。

泰南の号は、泰麓、楠山両師の号よりいただいたもので、この時代の泰南の作品は、多文字の行書による重厚な作品が多く、師泰麓の影響がうかがえます。

昭和二十(一九四五)年の東京大空襲で居宅を焼失した泰南は、同三十二(一九五七)年に再度上京するまでの十余年を郷里の八戸で過ごします。一年ほど暮らした泉清水と呼ばれた夫人の実家は、その字のごとく清らかな泉が豊かに流れる静寂な土地で、泰南は別号に「泉」を用いました。

戦後、書壇が大きく変遷していく中、泰南は独立書道会(現・独立書人団)に参加。理事長、議長などに就き、手島右卿と共に会の中心的役割を果たしました。これ以降、泰南の作風は、重厚的な造形美の作風から、字を少なくして淡墨を用い、構図を大切に文字の形を表現する作風へと変わっていき、「深雪」「雲海」などの少字数の代表作や「阿吽」「廬山煙雨」などの大作が次々と生まれました。

一方、泰南の作品は海外でも高い評価を得、ヨーロッパやアメリカでの海外展に出品し、書の国際化に貢献しました。また、書は楽しまなくては駄目であるとし、「書は人なり」を信条に後進の育成にも力を注ぎました。

寒山詩を好み、酒を愛した泰南は、その晩年の境地を「雲を見、水を眺め、月を見、風を聴く…。その時々を受けるはたとした感懐、感激、その時、私の書心が増す」と語り、書三昧(ざんまい)に徹しました。

今回は、初期から晩年までの作品を順に紹介するとともに、四季の「寒山」をはじめとする「寒山詩」のコーナーを設け、泰南の書の魅力をお伝えします。

(3月19日付 デーリー東北紙面に掲載)

◆◆H20年10月25日(土)午後3時30分から八戸商工会館 6階に於いて八戸大学主催の公開講座「そうけん土曜講座」が開催され、同大学で講師をされている安藤会長の「生きがいは第二の人生から」と題した講演がありました。参加された会員の方からのご感想です。◆◆◆◆◆◆◆◆

◇ 公開講座を聴いて ◇

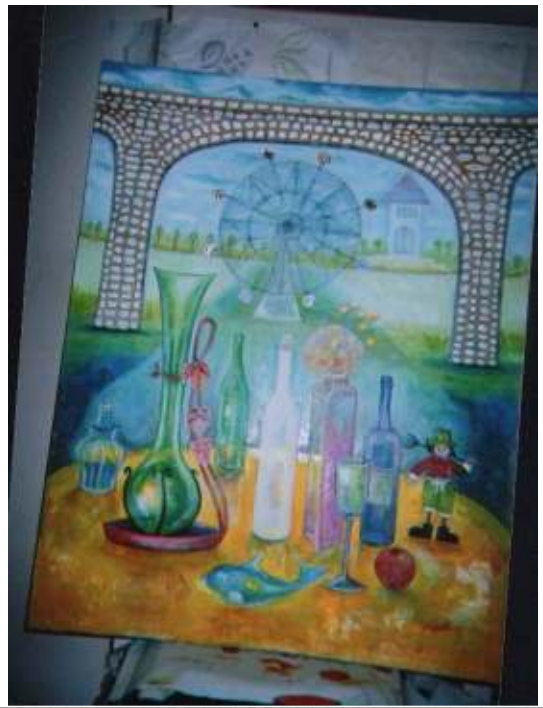
10月25日(土)会長の講話があり聴かせていただきました。「生きがいは第二の人生から」という内容でした。

会長自身、富士登山を経験されたことと人生観をなぞられて話してくださいました。笑いを交えて豊富な話題で感銘を受けました。

私自身も第二の人生の只中にあり、まだ生きがいになりえるほどではないけれど絵は大好きです。まじめに取り組んでないときもあるけど、気がつけば絵に向き合ってる時間はたくさん流れています。いつかは他人に見て貰いたいと考えようにもなりました。

会長の講話を聴けたことで、私の心の奥にしまっておいた勇気と自信を引っ張り出してみようかなと思っています。

安達 英子



2008年八戸市美術展協会賞をいただいた「硝子と空」本多初海ハビボ会員の作品です。
おめでとうございます。

◆ボランティア研修◆

H20年10月10日(金)から10月26日(日)まで八戸美術館で現代作家シリーズI「石橋忠三郎 ガラスアート展」・「下村正二の世界展」が開催されました。開催中の10月13日(月・祝)には講義室で「現代ガラスを語る」～ガラス工芸の伝統性と今日性～のタイトルで公開対談が行われ、日本ガラス工芸協会理事長の藤田潤氏と東京国立近代美術館工芸課長の金子賢治氏、石橋忠三郎氏の三氏による貴重なお話を聴くことが出来ました。

■日本ガラス工芸協会とは

1972年(昭和47年)、ガラスを共通の素材として創作活動をしている作家・クラフトマン・デザイナー達が呼びかけに応じ、「ガラス」と言う共通する一点で集まったユニークな団体です。

ガラスによる創作活動を通して、ガラスと人との結びつきを深め生活環境の向上と文化の発展に寄与することを目的としています。

1978年、第1回「日本のガラス展」を機に3年毎の協会展、毎年企画展等を軸に会報の発行や会内外への広報活動を行い、2006年6月現在会員総数116名で構成されています。また賛助会員としてガラス関連の企業や個人の賛同と協力を得ています。

(協会ホームページから)



◇生きがい求めて◇

趣味を通じて、自分を磨き、育て、少し社会に役立つことを老後の生きがいにしたいと考えていた。市の広報で「ハビボ会」のことを知り、美術館で説明を受け早速入会。

私の探していたものがやっと見つかった気がした。会長さんの生き方やパワーに感動し“元氣”を貰う。研修会や鑑賞の旅では、ちょっぴり知的で豊かな気分を味わう。納涼会、忘年会は素敵な仲間に出会えるのが嬉しい。幹事さんの心配りに感謝します。自分の都合で資料整理のボランティアが出来ず、今はハビボ会のお世話になりっぱなしで心苦しく思う。

美術館に図書館があることを初めて知った。美術蔵書は市立図書館より豊富なのでは。職員の方のお話では、本は誰でも自由に閲覧出来るそうですが、市民の方は意外と知らないのでは？…

素晴らしい書籍をたくさんの人々に利用して貰いたい。

鈴木 リヨ

『鑑賞の旅』

秋の鑑賞の旅は10月16日(木)、青森県立郷土館で開催中の「ジュディ・オング 倩玉木版画の世界」を鑑賞した後、五所川原「立佞武多の館」を見学しました。

◇「ジュディ・オング 倩玉 木版画の世界」を観て

ジュディさんの版画には初見参です。県立郷土館をハビボ会員と一緒に訪れ、エントランスホールや展示室に掲げられた木版画の作品群に^{みなぎ}漲る研究心と典雅な趣とを感じとり「おお凄^{ちやうめい}い！」と声を発したほどです。

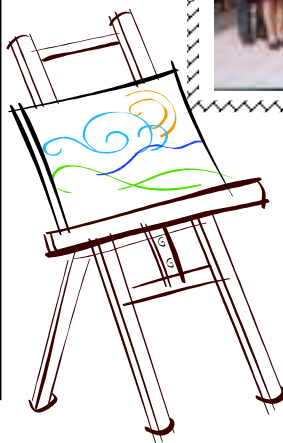
絵のモチーフを大切にし、写生を超えた写実として日本の原風景を思わせる寺院・家屋・庭園・四季の草花などに暖かな眼差しを注いでおられるのにも深く感動させられました。

奥行きや空間感は精緻なかつ構築的で、それに^{ちやうめい}重厚で力強い発色と、柔らかくて透明な色彩の味わいにも格別なものがありました。

木版画には多くの工程があって、ましてや多色木版ともなると色数分の版木を必要とし彫りでも刷り上がりの効果を考えながら、一刀一刃に感情を託さねばなりません。

この展覧会。初期から今日に至る作品に潜む情熱の大きさを推し量ってみて「天賦の才能も弛みない長年の研鑽によってのみ燦然と輝く」と学ぶこと多々ありました。

浅沼 弘



美術館の催し



ハビボ会員浅沼弘さんの版画も展示されています。

■コレクション展 IV■

「新収蔵品展」

日程 1月24日(土)~4月19日(日)

■企画展 生誕百年記念

「佐々木泰南～書の魅力～」

日程 3月20日(金・祝)~4月19日(日)



知人の梵字の展覧会での時、一緒の彼女が一言「マテイスみたいだね」と言った。思わず首を上下に振っていた。なんという感性だろう。日頃の彼女の口癖は「最近の説明より、自分自身の感性で楽しむようにしているのだ。納得、納得...」

遠距離通信で筆足らずが多々あったと思いますがお許しください。次号からの刷新を楽しみにしております。山口



♪♪忘年会♪♪

~12月13日(土)八戸グランドホテル~

今年の忘年会は、サンタクロースに扮した平さんが、クリスマスソングに合わせてプレゼントを回している様子

も可愛くて、今でも私の脳に焼き付いています。初めてのカラオケの登場もあり各々美声を披露され、中には2回、3回と出場され最後まで賑々しく終わりました。これも偏に余興係の平さんのお陰と心から感謝しております。また次回を楽しみにして益々ハビボ会が品格を添えて楽しく展開して行くことを望みます。帰り道の長横町は昼のように明るく、若い人、中年の人でごった返し、私も少し若い頃を思い出して1人微笑みながらタクシーを拾いました。



中村 桂子



ハビボ会研修会

H21年3月27日(金)

1. 今年度の会計報告について
2. 新年度の年間行事について
3. 特別展(版画展)の監視について
4. 「ハビボ通信」の配布について
5. その他

今年度最後の研修会です。役員の方々お疲れ様でした。

◇編集後記◇

先頃、迷宮美術館に十和田市現代美術館が放映され、設立までのプロセスを観て感動でした。市民一丸となって設立に漕ぎ着き、完成時には絵を描いたことのない人も楽しそうに絵を描いていました。ゲストのルー・大柴の「みんなドュギヤザ」の一言に同感でした。

成田

ハビボ会に参加したおかげでたくさんの方と出会い、いろいろな展覧会をじっくり鑑賞する事ができました。

たくさん「出会い」に感謝して、これからも行動していきたいと思えます。

笹本

他の人に何かを伝えたいという想いから生まれた芸術。伝えたいという部分ではマスコミも同じ。しかし、時代によって風化しない、永遠の価値を持つ、深く伝わる、のが芸術。去年仙台で観た、ウィーン史美術館。当時はまさに、マスコミの役目も担っていた。記録という使命もあった。ベラスケスは王族からの断れない多量の注文のために過労死。時代によっていろんな意味が見える。芸術は深い...なるほど...。

千葉